

みんな一所懸命に生きている

吉岡晶子

四歳児はとつてもおもしろい。自分で自分のことがわかっていづもりでいるのに、ちよつと食い違つていたりする。あれもやりたい、これもやりたい、できると思ふ、と自信をもち始める。自分なりにいろいろな行動に移すが、やつてはみたものの現実はとつても厳しくて、一所懸命なのにうまくいかなくて、挫折したり悩んだり……。

本園の四歳児年中組は、三歳児年少組からの進級児と新入児との混合メンバーで構成されている。それぞれ

れ自分なりのペースで新しい生活を一歩一歩歩み続け、生活を広げていく。やりたい、欲しい、僕が、私かと主張しながら、みんなと過ごしていくということを実感していく。

周囲のことも目に入るようになり、いろいろ気がつく。気がついたことには「何してるの?」「どうしたの?」「何かしようか?」と、やじ馬的に集まつたり、ややおせっかいに世話を焼こうとしたりする。その結果がうれしくて楽しくなる時と、こんなはずではなかつ

たという結果を招く時とある。教師も一緒に渦中の人と
となり、何とかこれから先の生活につながるような収
め方にしたいと思つてかかわるが、なかなか難しい。
張り切つたり夢中になつたり、がっかりしたり悔し
がつたり、でもめげずにいろいろなことに立ち向かっ
ていく四歳児。本当に忙しい。

M子の「両方やりたい」

M子はとても活動的である。何でもやってみたい。
言葉も達者で、動きも言葉もテンポが早い。一つひと
つのことに思い切り力を出して、目いっぱい楽しんで
いる。

二学期も半ばのある日、遊戯室で子どもたちと私は
一緒に音楽をかけて踊っていた。舞台の上でクルクル
回つたり、手と手をとってポーズをとつたりして楽し
んでいた。M子もやって来て、にこにこ笑いながら見
ていたが、そのうちに「やりたい」と舞台の上の上

がってきた。みんなも「やろうやろう」と大歓迎。ひ
としきり踊ると、「ねえ。(テレビアニメ)プリキュア
(の曲)も踊ろう」という声が上がった。M子は
「私、(CDを)借りてくる」と言つて、走つて遊戯室
を出ていった。実行力のあるM子。どこに行つたら手
に入るかも瞬時にひらめいたようだった。

M子を待っている間に保育室に行つてみると、ま
ごとコーナーで、M子が大きな口をあけ涙をぼろぼろ
流して泣いていた。近くにいるR子は、「M子ちゃん、
どうして行っちゃったの?」と怒っている。事情を聞
いてみると、「M子ちゃんはここ(ままごと)で待つ
てるって言つたのに……」とのこと。どうやらM子は
R子、A子、E子と一緒にままごとをしていたよう
だった。留守番をしているはずなのに、みんなが戻つ
たらM子はいなかった。そのことを、仲間なのにどうし
て違う遊びに行つてしまったのかと指摘されたようだ。
ただただ悪気もなく両方やりたくなつてしまったM子。

M子はどっちもやりたいし、言われていることはわかるし……で困惑。自分の思いと、仲間の思いの間で

「こんなことになって」と思ったであろう。教師はそれぞれの話を聞いて、「そうか、そういうことだったのね」と、互いに相手の思いに耳を傾けられるようにと願いながら、それぞれの言い分を聞いた。結局、M子は初めに遊んでいたままごとに行ったん戻り、後から踊りにも「行ってくるね」と言って出向いたようだ。

このごろ、子どもたちは遊びの仲間になること、仲間であることを気にしている。日ごろ、どちらかというと自分の思いどおりに物事を進めて何とかなっていたM子が、そうはいかない、みんなの思いもある、ということを実感した場面であった。

何日か経ったある日、M子が「先生、あのね、私、お店屋さんで踊りと両方やっているの」と言いながら教師の横を走り去っていった。そのたくましさに思わず笑ってしまった。

「助けるつもりだったのに」

子どもたちが数人集まっついていて何やら不穏な雰囲気。U夫、Y夫、R夫が泣いている。A夫も神妙な顔をしている。「どうしたの？」と女兒たちも取り囲んでいる。S先生が「そうか、みんなお友達のことを心配して助けようと思ったけど、こんなことになっちゃったのね」とつぶやいていた。

よくよく聞いてみたところ、事の起こりは、うっかりU夫がA夫にぶつかってしまい、A夫が倒れてしまったことだった。それを見たY夫は、「何をするんだ。押しではいけないんだ」とU夫をたしなめた。U夫は行動が素早く、目標目指してまっしぐらに進んでしまうようなところがある。怒られたと思ったU夫は「違うよ」とY夫にやり返し、その反応にY夫も怒ってU夫をなぐり、二人とも泣いてしまった。それを見ていたY夫と仲良しの友達R夫は「Y夫に何をする、

やめろ」と、止めに入った。「ぼくの友達に何をやるんだ」という思いだったのだろう。止めに入った姿を遠くから見た丁夫が走ってきて「けんかはいけない」と、実力行使。とうとうR夫も泣きだすはめになってしまったということだった。事の発端にかかわるA夫も困った表情になっている。泣いたり怒ったりしよげたり……と一大事件の現場に、クラスの友達が集まってきた。

泣いている人はかわいそう、手を出した人が悪いという雰囲気になっていた。特に丁夫は事情がわからず手を出したために渦中の人になり、みんなを泣かせてしまったような雰囲気になって戸惑っていた。やり方とはかくも、みんな何とかしたい思いだったことがわかったので、私は順番にそれぞれの思いと食い違いを言葉にした。集まったみんなも状況がわかってくと、責める雰囲気ではなくなってきた。何も言えずにいたA夫も、やられたのではなく不慮の事故であると言ってくれた。「助けようとしたのにこんなことに

なっちゃって」というような、何か同情的な空気が漂ってきた。

言葉少なに様子を見ていた子どもたちの表情からは、「そういうことであるね、自分で言葉には表せないけど、気持ちと結果がバラバラになっちゃって悲しいというか情けないというか、そんな気持ちなのよね」というような思いが伝わってきた。当事者の子どもたちも、気持ちをわかってもらえたと思ったのか、だんだん落ち着いてきた。

クラスの友達の出来事に無関心ではられない子どもたち。方法には一言物申したい部分もあるが、みんなの気持ちはうれしかった。

「でも、がんばる！」

保育室の前にサッカーゴールを並べてボールを蹴り合っている五歳児（以下、年長と記す）を、横目で見ながら遊んでいた子どもたち。「かっこいいな！」

「やってみたいな」と思いつつも、「入れて」とはなかなか言えないでいた。でも、年長さんがいない時にボールを借りてきてちよつとやってみる、まねしてみるといふ姿はあつた。二学期後半になり、自分たちも「サッカー」と称してボール蹴りをするようになった。ボールを足で蹴る、手は使わないということぐらいしかルールのない四歳児(以下、年中と記す)のサッカーは、ひたすらボールを追いかけ、疲れると自然消滅の、のどかなゲームだつた。

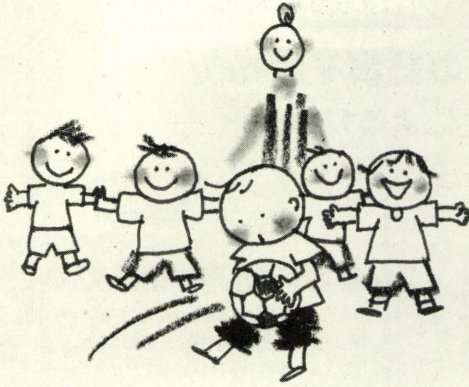
教師も一緒になつて遊んでいると、年長さんがやってきて「やってやろうか」と応援してくれるようになった。年長児が加わると、ボールの動きもスピードが増し、声の掛け合いがあつて雰囲気盛り上がり、一気にサッカーらしくおもしろくなつた。となると、自分たちは走つてはいるもののボールは遠くにあり、なかなか近づけない。でも、必死で走つていた。年長さんはなかなか厳しくて、「ハンド!」「こつちのチームの

ボールだよ」などと言われたりする。よくわからないままに言われたとおりにしていた。しかし、だんだんおもしろくなくなつて、一人抜け二人抜けして、最後は年長児だけのサッカーになることもあつた。

それでも何回も繰り返し返され、年長児対年中児のゲームになることもあつた。そうなるとなぜか年中児はゴールの前に並んで立ち、全員がゴールキーパーのようになつてひたすら守りに入つた。年長児はどんどんゴールを決め、20対0のような得点差になるが、年中児は点数よりも自分がボールを何回蹴つたか、ゴールできたかなど、自分にとつてどうなのかが大問題のようだつた。教師も仲間に入つて一緒にキーパーになり夢中で挑んだが、いつも大差で負けた。でも、またやる。負けることにめげない。そのタフさに感心した。たとえ「負けだ」「違反だ」と言われても、年長さんと一緒だからこそおもしろくなる、ワクワクしてくるといふ実感が、前向きなひたむきさと呼び起こしてくれ

たのだろう。対等にしっかりと向き合ってくれる年長さんの存在の大きさを改めて思った。

自分の苦手なこと、うまくいかないこともわかり始めてくるが、まだ「すごいでしょ」「カッコいいでしょ」と、身の程とはちよつとずれる自信もあるのだろうか。果敢に立ち向かう姿に脱帽だった。



意欲的になったり、あがいてみたり、自信をもったり、落ち込んでみたり、まだまだいろいろな感覚や気持ちがちや混ぜになっている四歳児。そのような子どもたちに「あなたたちはそんなことを考えているのか」と感心させられたり、「どうしよう」と一緒に悩んだりしながら教師も同じ気持ちになってしまい、子どもたちと一緒に夢中になったりムキになったり、反省したりする日々だった。でも、何ともいえない不思議な連帯感を感じた。

子どもたちは、物事に向き合いながらいろいろな気持ちになりつつも前に進もうとしている。それを「わかっているよ」と支えることが、私たち教師の役目のだろう。でも、もしかしたら、私たちこそパワーあふれる子どもたちに支えられてエネルギーをもらっているのかもしれない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)